

東寺（教王護国寺）旧境内

2002年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

東寺（教王護国寺）旧境内

2002年

財団法人京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しております。また、平安京遷都以来今日に至るまで都市として永々と生活が営まれてきており、各時代の生活跡が連綿と重なり合っています。都であるゆえに、そこから発見されるその一つ一つは、日本の歴史を語るうえで欠くことのできないものとなっています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした遺跡の発掘調査を通して京都の歴史の解明に取り組んでおります。その成果を市民の皆様に広く公開し活用いただけるよう進めていくことが研究所の責務と考えております。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、出土遺物の小・中学校や公的施設での貸出展示、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところであります。

さて、当研究所では従来各年度毎で報告してまいりました「京都市埋蔵文化財調査概要」を改め、平成13年度調査分より各調査箇所毎に1冊の報告書として発刊しております。その第7冊目として、このたび学校法人真言宗京都学園洛南高等学校新校舎建設に伴います東寺（教王護国寺）旧境内の発掘調査の成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援をたまわりました関係者各位に対して、厚くお礼ならびに感謝を申し上げます。

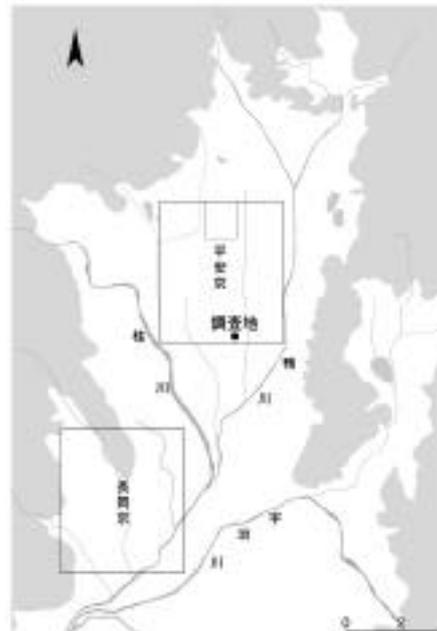
平成14年10月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 東寺（教王護国寺）旧境内
- 2 調査地点所在地 京都市南区壬生通八条下る東寺町（洛南高等学校）
- 3 委託者及び承諾者 山本土木株式会社
- 4 調査期間 2001年6月14日～2002年3月29日
- 5 調査面積 約3,811㎡
- 6 調査担当職員
調 査 吉崎 伸・高橋 潔・近藤知子・南出俊彦
測 量 宮原健吾
写真撮影 村井伸也・幸明綾子
- 7 基準座標
基 準 点 京都市遺跡測量基準点
方位・座標値 使用測地系 日本測地系（改正前） 平面直角座標系 （ただし、単位（m）を省略）
標 高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 8 土 壤 名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帳』に準じた。
- 9 地 図 京都市都市計画局発行の地形図（1：2,500）「梅小路」を調整使用。
- 10 遺構番号 検出順に通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 11 遺物番号 土器類・瓦類・金属類・その他の順に通し番号を付した。
- 12 資料整理
資料整理協力 吉村正親・上村和直・南出俊彦
・山本雅和・平尾政幸・田中利津子・卜田健司・竜子正彦
文字資料判読 東寺の協力を得た。
写真撮影 村井伸也・幸明綾子
- 13 本書編集 吉崎 伸・高橋 潔・近藤知子
執筆分担 吉崎 伸：1、2（1・2）
3（1～5）、5
高橋 潔：4（1～4）



（調査地点図）

目 次

1 . 調査経過	1
2 . 位置と環境	2
(1) 位置と環境	2
(2) 周辺での調査	3
3 . 遺 構	4
(1) 層 序	4
(2) 遺構の概要	5
(3) 平安時代中期末から後期の遺構	6
(4) 室町時代の遺構	6
(5) 江戸時代の遺構	10
4 . 遺 物	12
(1) 土 器 類	12
(2) 瓦 類	18
(3) 金属製品	24
(4) その他の遺物	25
5 . ま と め	26

図 版 目 次

図版 1	遺構 第 3 面 (平安時代中期 ~ 後期) 遺構配置図
図版 2	遺構 第 2 面 (室町時代) 遺構配置図
図版 3	遺構 第 1 面 (江戸時代中期 ~ 後期) 遺構配置図
図版 4	遺構 井戸293・土壇964・井戸839・井戸993・建物1031・建物1002・建物1001実測図
図版 5	遺構 建物1003・建物1007・建物1004・建物1005・建物1006実測図
図版 6	遺構 建物2198・建物2197実測図
図版 7	遺構 室101・室534実測図
図版 8	遺構 井戸840・井戸867・井戸237・井戸469・井戸2307・井戸2687実測図
図版 9	遺構 建物36・建物30・建物2131・建物33実測図
図版 10	遺構 建物2024・建物2112・建物 5 実測図
図版 11	遺構 地鎮土壇71・地鎮土壇2121・地鎮土壇2122・地鎮土壇2150・石垣 1 実測図
図版 12	遺構 カマド群57・カマド群57-12号・カマド群57-2号・排水施設102実測図

- 図版13 遺物 井戸993・土壙964・土壙196・井戸839・井戸293・土壙277出土遺物実測図
- 図版14 遺物 土壙2554・溝2237・溝2400下層・溝2178・溝2290・溝128出土遺物実測図
- 図版15 遺物 土壙2240・土壙933・溝2159・溝835出土遺物実測図
- 図版16 遺物 井戸854・土壙816・溝2178下層出土遺物実測図
- 図版17 遺物 井戸840・室101・溝2440・井戸519・溝2435出土遺物実測図
- 図版18 遺物 池2001出土遺物実測図
- 図版19 遺物 出土軒丸瓦拓影・実測図
- 図版20 遺物 出土軒平瓦拓影・実測図
- 図版21 遺物 出土軒平瓦・文字瓦拓影・実測図
- 図版22 遺物 出土文字瓦拓影・実測図
- 図版23 遺構 調査区より東寺境内を望む（北西から）
- 図版24 遺構
- 1 井戸993（南東から）
 - 2 土壙964（北から）
 - 3 井戸839（南から）
 - 4 井戸293（東から）
- 図版25 遺構
- 1 第1区、第2面全景（西から）
 - 2 第2区、第2面全景（東から）
- 図版26 遺構
- 1 建物2197（北から）
 - 2 建物1001・1002（北から）
 - 3 建物1004・1005（北から）
- 図版27 遺構
- 1 室534（北東から）
 - 2 室101（北から）
 - 3 土壙2554（北から）
- 図版28 遺構
- 1 井戸840（東から）
 - 2 井戸237（北から）
 - 3 井戸2307（北から）
- 図版29 遺構
- 1 第1区、第1面全景（西から）
 - 2 第2区、第1面全景（東から）
- 図版30 遺構
- 1 建物30・36（北から）
 - 2 建物5（東から）
- 図版31 遺構
- 1 建物2024・2112と池2001（東から）
 - 2 建物2112（北から）
 - 3 建物2112地業状況（北西から）
- 図版32 遺構
- 1 カマド群57（北東から）
 - 2 石垣1（北西から）

- 図版33 遺物 井戸993・土壇2554・溝2400下層出土遺物
 図版34 遺物 土壇816・溝2178下層・室101出土遺物
 図版35 遺物 池2001出土遺物
 図版36 遺物 出土軒丸瓦
 図版37 遺物 出土軒丸瓦・軒平瓦
 図版38 遺物 出土軒平瓦
 図版39 遺物 出土軒平瓦
 図版40 遺物 出土軒平瓦・鬼瓦・鴟尾・道具瓦
 図版41 遺物 出土文字瓦
 図版42 遺物 出土文字瓦
 図版43 遺物 出土金属器・その他の遺物
 図版44 遺物 出土文字瓦・その他の遺物

挿 図 目 次

図 1	調査位置図（1：5,000）	1
図 2	調査前全景（北西から）	2
図 3	調査風景	2
図 4	東寺諸院推定復元図	3
図 5	調査区配置図（1：1,000）	3
図 6	基本層位図（1：40）	4
図 7	蜜柑形蓋物実測図（1：4）	17
図 8	和歌拓影（1：3）	24
図 9	江戸時代の伽藍および子院古図（トレース図）	27

表 目 次

表 1	遺構概要表	5
表 2	遺物概要表	13
表 3	軒瓦分類表	19
表 4	出土銭貨一覧表	24

東寺（教王護国寺）旧境内

1. 調査経過

調査地は京都市南区壬生通八条下る東寺町に所在し、調査前は学校法人真言宗京都学園 洛南高等学校のグラウンドであった。洛南高等学校は現校舎の老朽化に伴い、ここに新校舎を建て替える計画を立てた。ところが、当地は東寺（教王護国寺）旧境内の一画にあたるため、校舎建設に先立って埋蔵文化財調査の必要性が生じた。

試掘調査 まず遺構の残存状況を把握するために試掘調査を実施した。これは京都市埋蔵文化財調査センターが担当し、2000年12月4日から6日の3日間をかけて行った。その結果、対象地のほぼ全域において中・近世の遺構を多数確認し、引き続き発掘調査を行う運びとなった。

発掘調査 調査は（財）京都市埋蔵文化財研究所が担当し、2001年6月14日から開始した。調査に際しては、排土処理の関係で調査区を2つに分けて実施することとなり、まず東側に第1区（1,900㎡）を設定、西側は排土置き場とした。これが終了した後に反転し、西側に第2区（1,870㎡）を設けて調査を行った。また、第2区では遺構の範囲確認のため北側と西側に拡張区



図1 調査位置図（1：5,000）

(計41㎡)を設けた。このため調査総面積は3,811㎡である。検出した遺構は平安時代から江戸時代のものがあり、これらを1・2区共に3回(3面)に分けて調査・記録した。また、下層には平安時代以前の流路(河川)と考えられる堆積が認められたが、遺構が広範囲にわたり、かつ遺物の出土量も少ないため、その一部を断ち割って土層の堆積状況を確認するにとどめた。そして2002年3月29日に199日間を費やして全ての調査を終了した。

なお、調査期間中、2001年9月22日に京都市考古資料館主催の「第7回京都市遺跡巡り」の一環として現場見学会(参加者約100名)を開催し、さらに洛南高等学校の文化祭にあわせて10月7日に第1区の現地説明会(参加者約800名)を、2002年2月16日には第2区の現地説明会(参加者約150名)を開催した。また、洛南高等学校附属中学校、京都市立陶化中学校・郁文中学校・蜂ヶ丘中学校などの体験学習の生徒を随時受け入れ、調査成果の公表、資料の活用に努めた。

2. 位置と環境

(1) 位置と環境

調査地は東寺(教王護国寺)の北壕(蓮池)の北側に位置し、北は針小路通、西は壬生通に面している。平安京の条坊復元によると当地は左京九条一坊十町にあたる。ここを含めた東寺主要伽藍の北側に位置する九・十・十五・十六の4町は、平安京造営当初においては東寺の境内地にあたり、東寺の経営を支えた花園院、倉垣院、大衆院、政所院といった諸施設があったと推測されている¹⁾(図4)。こうした施設の実態やその後の経過については明らかでない。しかしながら鎌倉時代にはここに子院が形成されはじめたことが明らかにされており²⁾、この時期には東寺北側の様相が大きく変化したことが窺える。その後、中・近世を通じてここでは大小多くの子院が消長していったことが各種の史料から読みとれる。江戸時代に作成された絵図面には、各子院の名称、地割り、建物配置などを詳細に記載しているものもあり³⁾、その具体的な状況を窺い知ることができる。また現在も、東寺北大門から八条通の北総門に至る櫛笥小路に面して観智院、宝菩提院などの子院が軒を連ねており往時の様相を今に伝えている。明治時代には洛南高等学校の前身である東寺中学校が創設され、当地には木造の校舎が建てられた。その後、1962年に校舎の



図2 調査前全景(北西から)



図3 調査風景

老朽化に伴って建て替えた際に、針小路通を挟んだ北側に存在したグラウンドと場所を入れ替え、名称も「洛南高等学校」と改めて現在の状況になった。

(2) 周辺での調査

調査地の周辺ではこれまでに数次の調査が行われている。東寺の伽藍内においては1977年から1981年にかけて防災工事に関連して発掘調査⁴⁾が実施された。調査では金堂基壇、僧房、回廊などの遺構を検出し、東寺造営当初の伽藍を復元する手がかりを得ている。さらにこの調査の重要な点は、東寺の伽藍中軸線を導き出すことに成功し、以前の調査で明らかになっていた西寺の伽藍中軸線のデータと関連させることによって、平安京全体の条坊復元の基礎を築いたことにある。このほか、戦後から近年までに実施された各建物の解体修理に伴って主要建物の基壇⁵⁾が、1988年には鎮

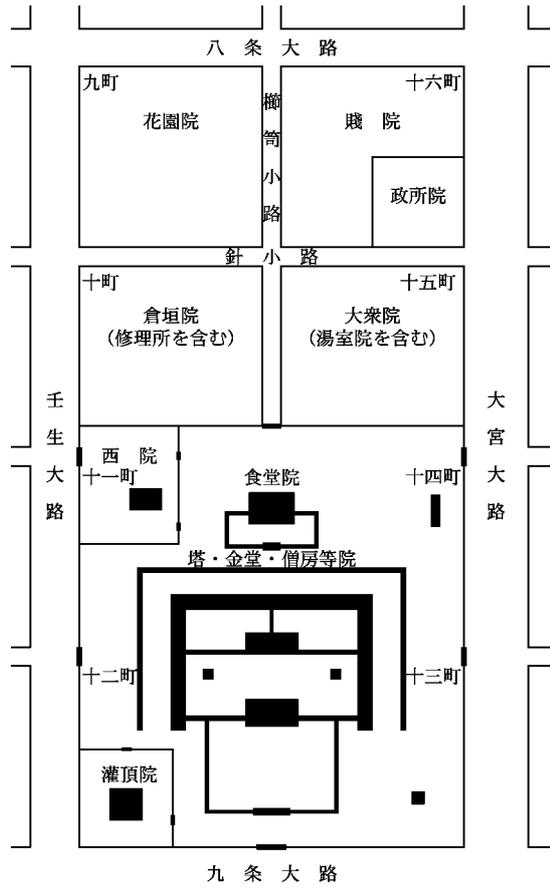


図4 東寺諸院推定復元図

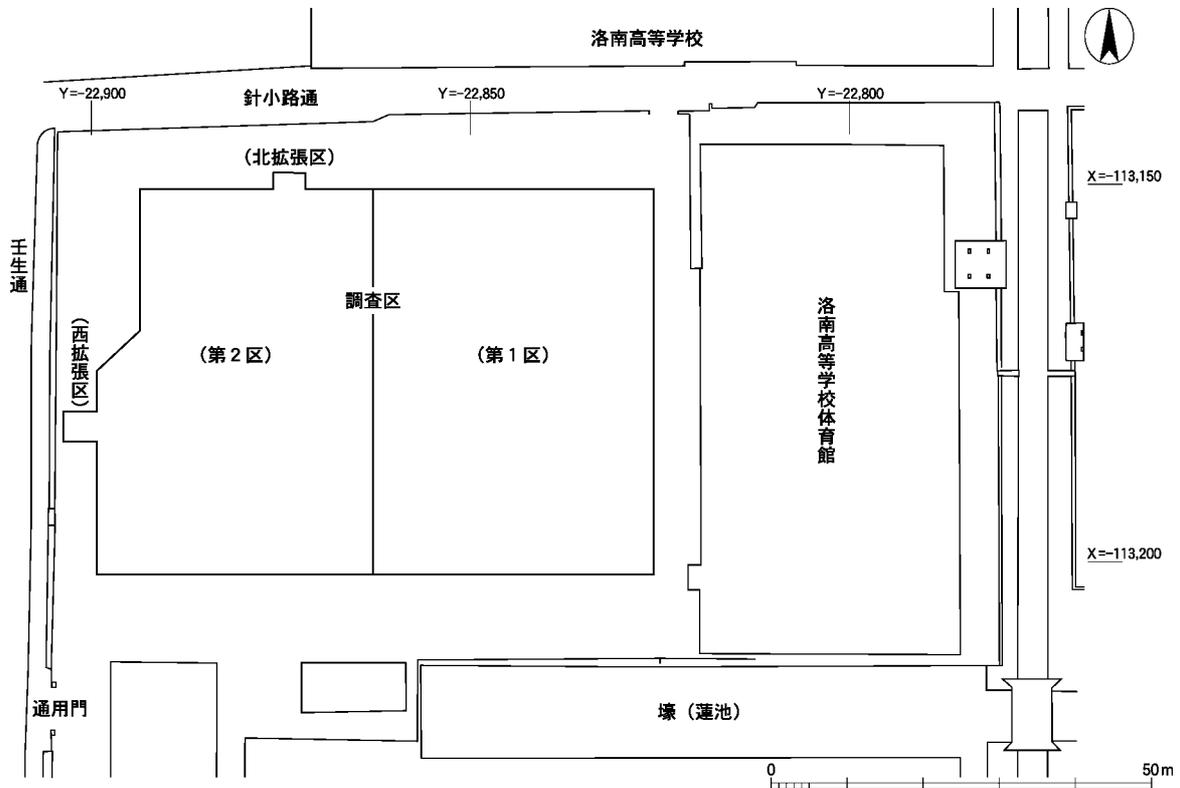


図5 調査区配置図(1:1,000)

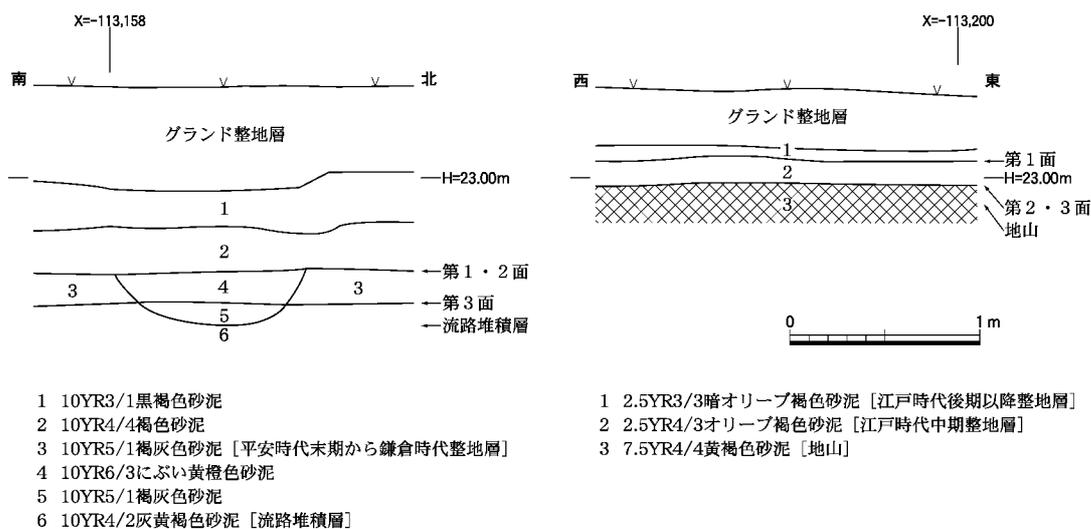
守八幡宮再建に伴って八幡宮の遺構⁶⁾が、さらに1998年には講堂須弥壇⁷⁾が調査されている。このように東寺境内では大規模な発掘調査は行われていないが、各建物の基壇が部分的に調査され、徐々にではあるが創建当初の伽藍配置、その後の変遷過程が明らかになりつつある。

一方、伽藍の北側では、今回の調査区に隣接した東側で洛南高等学校体育館建設工事に伴う調査⁸⁾が1979年に行われている。この調査では江戸時代の建物、中世の土壌、溝、井戸などを検出し、中世から近世に営まれた東寺の子院の状況を明らかにしている。また、焼土や焼け歪んだ瓦が堆積した平安時代の土壌を検出しており、瓦窯本体は確認できなかったものの、東寺造営に関連した瓦窯が存在する可能性を示唆している。この他1988年には左京九条一坊十五町域で調査⁹⁾が行われ、平安時代から中・近世の遺構を検出している。以上の2例が主なもので、伽藍北側の遺構の実態は未だ不明な点が多い。

3. 遺 構

(1) 層 序

当地は調査前にグラウンドであったため、地表下約0.5mまでは真砂土や碎石などのグラウンド整地層で覆われている。その下には明治時代の耕作土とみられる暗オリーブ褐色砂泥層(2.5YR3/3)などが0.1m、江戸時代中期の整地層であるオリーブ褐色砂泥層(2.5YR4/3)などが0.2m程度ある。さらにその下には黄褐色砂泥層(7.5Y4/4)があり、これが当地の基本的な地山層である(図6右図)。ところが、この黄褐色砂泥層が検出できるのは調査区の南東部に限られる。なぜならば、調査区の大半は黄褐色砂泥層を切り込んで北東から南西方向に流れる幅広い流路(河川)にあたるからである。この流路は、その最終堆積層である灰黄褐色砂泥層(10YR4/2)や黒褐色



2区西壁断面図

1区東壁断面図

図6 基本層位図(1:40)

砂泥層（10YR3/2）に古墳時代の遺物が含まれており、その時期にはほぼ埋没したものと考えられる。しかしながら、東寺が造営される平安時代にも依然低地として残り、河岸から流路側、つまり南東から北西に向かって緩やかに下降する地形を形成している。今回検出した第3面の遺構はこうした地形の影響をうけ、微高地状を呈する調査区の南東部に集中している。その後、流路跡は平安時代末期から鎌倉時代に褐灰色砂泥層（10YR5/1）や暗灰黄色粘質土層（10YR5/2）によって大規模に埋立、整地される。第2面の遺構はこの整地層の上に展開する。また、整地層には平安時代中期の瓦が大量に含まれており、特に微高地を呈する黄褐色砂泥層の縁辺部には、瓦溜状の遺構を形成している。江戸時代中期になると調査区の東半部のみがオリーブ褐色砂泥層（2.5YR4/3）などによって整地される。このため調査区の中央付近に約0.5mの段差が生じ、ここに後述する石垣が積まれる。この作業は傾斜した土地を2段の平坦面に造成することを目的にしたものと考えられる。従って第1面の遺構については調査区西半の第2面と同一面、東半は整地層の上面に成立する。

（2）遺構の概要

検出した遺構は1区1,046基、2区846基、拡張区14基、計1,906基である。遺構の時期は平安時代から江戸時代までのものがあり、これらを3時期（3面）に分けて調査した。検出した面と遺構の時期を整理すると表1の通りである。ただし、それぞれの面には中心となる時期があり、それ以外については遺構数も少なくまとまりもない。そこで今回は各面の中心にあたる時期の主要遺構のみを取り上げて報告する。

第3面の中心は平安時代中期末から後期である。遺構は微高地を呈する調査区の南東部に集中し、井戸、土壇などを検出した。柱穴も存在するが建物としてまとめることはできなかった。なお、図版1にはその後の整地に伴って形成された瓦溜の位置も示している。

第2面では鎌倉時代から江戸時代前期の遺構を検出したが、その中心は室町時代の遺構である。

表1 遺構概要表

検出面	時 期	遺 構
第3面	平安時代	IV期 井戸993、土壇226・964・2624
	中期～後期	V期 井戸839・293、土壇196・277・992
第2面	鎌倉時代～ 江戸時代前期	VIII期 土壇556・2554、溝128・2178・2237・2290・2400下層
		IX期 井戸854、土壇816・933・2240、溝835・2159・2178下層
		X期 室101、井戸840・519、溝2440
		XI期 溝2435
		詳細 不明
第1面	江戸時代中期以降	XII期 池2001
	詳細 不明	建物5・30・33・36・2024・2112・2131、柵列2328、井戸35・122・123・213、 土壇34、溝58・59・60・61・63・2002・2003・2794、石垣1、カマド群57、炉68、 池62・2244、地鎮土壇64、71、2121、2122、2150、2151、2152

東西・南北方向の溝（堀）を多数検出しており、これらの溝によって方形の区画が形成されている。それぞれの区画内には建物や井戸、倉庫あるいは室などの施設が配置されている状況が認められる。今回の調査では最も遺構密度が高い。

第1面の中心は江戸時代中期から後期である。この時期の遺構としては、建物や井戸、土壌など多数を検出し、室町時代に次いで密度が高い。これらは調査区のほぼ中央で検出した南北方向の石垣とこれに直交する溝や柵列によって3つの区画に区分されていると考えられる。

以下、時期ごとに主な遺構について述べる。なお、遺構および遺物の時期は平安京・京都 期～ 期編年案に準拠する¹⁰⁾。

（3）平安時代中期末から後期の遺構（図版1）

井戸993（図版4・24） 調査区の南東部で検出した方形縦板組の井戸である。掘形は直径約1.7mの円形で、深さ約1.5mである。井戸枠は一辺約0.8m、側板の保存状況が悪く、下端の高さ0.2m程度を残すのみである。最下部には横棧が残存する。また、底部中央には一辺0.5m、深さ0.25mの蒸籠組の板枠を埋め込む。内部からは土師器、灰釉系陶器、瓦器、輸入磁器（白磁）などの土器類が多量に出土している。

土壌964（図版4・24） 調査区の南東部で検出した南北2.3m、東西1.2m、深さ0.1m程度の方形土壌である。東と南側の一部が後世の遺構に壊されている。土壌底面には薄い炭化物の層が一面に広がり、完形品やそれに近い土師器の皿が出土している。土壌の形状や方位、遺物の出土状況から、土壌墓あるいは木棺墓の可能性はある。

井戸293（図版4・24） 調査区の南東部で検出した方形縦板組の井戸である。掘形は直径約3.0mの円形で、深さ1.3mである。井戸枠は一辺1.2m、深さ1.0mであるが、保存状況は悪く、四隅の支柱と最下段の横棧が残存しているにすぎない。内部底面には拳大の石が敷かれている。

井戸839（図版4・24） 調査区の北東部で検出した方形の井戸である。掘形は一辺1.2mの隅丸方形、深さ0.3mである。井戸枠は方形縦板組であったとみられ、底部に最下段の横棧がわずかに残存している。復元すると一辺0.7m程度の小型の井戸になる。

（4）室町時代の遺構（図版2・25）

建物1001（図版4・26） 調査区の北東部で検出した東西2間（4.15m）、南北4間（6.6m）の掘立柱建物である。建物内部中央にも柱列が認められることから総柱建物であると考えられる。また、側柱列には多数の柱穴が認められ、2～3回の建て替えがあったものと思われる。柱穴の掘形は0.3～0.4mの円形、深さ0.1～0.4m、柱当は直径0.1～0.15mの円形を呈する。底部に瓦や直径0.2m程度の石を据えているものも多い。なお、この建物の東側柱列は後述する建物1002の東側柱列とほぼ柱筋を揃えており、2つの建物は同一計画の基に建てられたものと考えられる。

建物1002（図版4・26） 調査区の北東部で検出した東西2間（4.2m）、南北2間（5.3m）の掘立柱建物である。柱間は不揃いである。柱穴の掘形は0.3～0.4mの円形、深さ0.1～0.4mで

ある。柱当は直径0.1～0.15mの円形を呈する。

建物1003（図版5） 調査区の東部で検出した東西2間（3.5m）南北5間（7.7m）の南北に長い掘立柱建物である。柱間は1.3～1.7mとやや不揃いである。柱穴の掘形は0.3～0.5mの円形あるいは隅丸方形を呈し、深さ0.1～0.3mである。柱当は直径0.15～0.2mの円形を呈する。

建物1031（図版4） 調査区の東部で検出した東西2間（2.2m）南北4間（3.8m）の総柱の掘立柱建物である。上述の建物1003と重複関係にあり、当建物が先行する。柱間は1.1m前後である。柱穴の掘形は0.3～0.5mの円形を呈し、深さ0.1～0.3mである。柱当は直径0.15～0.3mの円形を呈する。この建物は主軸が北に対してやや東に傾く。

建物1004（図版5・26） 調査区の北東部で検出した東西2間（5.0m）南北3間（6.2m）の総柱の掘立柱建物である。柱間は東西が2.2～3.0m、南北が2.0m前後である。柱穴の掘形は0.3～0.5mの円形を呈し、一部に方形のものも認められ、深さは0.1～0.3mである。柱当は直径0.15～0.2mの円形を呈する。掘形の底に上面が平らな石を据えているものが多い。

建物1005（図版5・26） 調査区の北東部で検出した東西4間（4.0m）南北4間（4.1m）の建物である。柱穴掘形に径0.05m程度の礫を多数詰めたものも多く、根石と考えられることから礎石建物と思われる。柱穴の掘形は0.3～0.7mの円形を呈し、深さ0.1～0.3mである。柱間は1.0m程度と狭い。上述の建物1004と重複するが、柱穴に直接の重複関係がないため前後関係は不明である。

建物1007（図版5） 調査区の北部で検出した東西2間（3.8m）南北3間（6.0m）の総柱の掘立柱建物である。柱間は1.8～2.5mとやや不揃いである。柱穴の掘形は0.3～0.5mの円形を呈し、深さ0.1～0.3mである。掘形の底に上面が平らな石を据えているものが多い。後述する土壌816と重複関係にあり、当建物が先行する。

建物1006（図版5） 調査区の南部で検出した東西3間（5.4m）南北2間（3.9m）の掘立柱建物である。柱間は東西が1.8m、南北が2.0m前後である。柱穴の掘形は一辺0.35m前後の方形を呈し、深さ0.1～0.2mである。柱当は直径0.15m前後の円形を呈する。掘形の底に瓦片を据えているものも認められる。

建物2198（図版6） 調査区の北西部で検出した東西7.5m、南北3.0mの掘立柱建物であると推測しているが、東側を溝2435に壊されている可能性がある。また、柱間が0.7～0.8mと非常に狭い部分と1.5mの広く不揃いな部分があり、平面形も歪んでいるため建物でない可能性もある。現状では後述する建物2197と北柱筋を揃えて並んでいるので建物と認識している。柱穴の掘形は一辺0.3m前後の円形を呈し、深さ0.1～0.3mである。掘形の底に石を据えているものも認められる。

建物2197（図版6・26） 調査区の北西部で検出した東西6間（12.0m）南北6間（11.0m）の礎石建物で、今回検出した建物では最大の床面積を有する。柱間は2.0m前後で南端の2間が1.5m前後である。建物内部にも多数の柱穴を確認しているが、並びを十分に把握しきれていない。現状では北側の奥行き4間分が身舎で、南面の2間分を広縁と考えている。身舎はさらに東西2

間、南北4間ずつの3間に分割されているものと推測している。柱穴掘形は直径0.4～0.8mの円形あるいは隅丸方形を呈し、深さ0.1～0.3mである。中央に上面が平らな人頭大の石を据えているもの、さらにその下に拳大の礫や瓦片を詰めているものも認められる。また、補修も繰り返されたと考えられ、南面柱列では正規の柱位置以外に多くの柱穴を検出している。

柵列586・270・337 調査区中央北部で検出した建物1007・1004・1005が建つ区域を区画する柵列である。南北方向に586、東西方向に270・337を検出した。柱穴間は不揃いで建て替えがみられる。

柵列735・807・383 調査区北東部で検出した建物1001・1002の建つ区域を区画する柵列である。南北方向に735・807、東西方向に383を検出した。

柵列238 調査区南東部で検出した建物1031や後述する室101が築かれた区域の西を限る柵列である。柱穴間は不揃いで、密に重なる部分もみられた。

柵列2388・2600 調査区西端で検出した柵列である。2600は、後述する溝2400の東側に平行する。2388は、これに直交して東に延びる。

室101(図版7・27) 調査区の南東部で検出した東西6.5m、南北8.0mの竪穴状の遺構である。中段から下は壁面がほぼ垂直に落ち込む。上段の広がりには肩口が崩れたためと推測でき、下半部の東西4.5m、南北6.0mが本来の規模であると考えられる。深さは検出面から0.6mである。床面はほぼ水平で、四隅に近い3箇所では上面が平らな石を検出した。本来は残り1箇所にも石が据えられていたものと考えられ、ここに4本の主柱が立っていたものと推測できる。埋土からは土師器・瓦器などの土器類が多く出土している。

室534(図版7・27) 調査区の東部よりで検出した内法東西3.5m、南北1.5mの室である。深さは検出面から0.8mである。壁面は最下端に人頭大の石を積み、その上には瓦を小口積にしている。南西隅には幅0.7mの石積階段が造り付けられている。また、室の周辺には直径0.3m前後の柱穴が並んでいるのが認められ、覆い屋が存在していたものと考えられる。

井戸519 調査区の北東部で検出した井戸である。掘形は直径約2.2mの円形を呈し、深さ0.75mである。井戸枠は残存していない。埋土からは少量の土器類が出土している。

井戸469(図版8) 調査区の東部で検出した小型の井戸である。掘形は一辺約1.0mの隅丸方形を呈し、深さは1.05mである。井戸枠には直径0.65mの底のない桶を用いているが、保存状況は悪く痕跡をとどめるにすぎない。また、底部中央には直径0.3m、高さ0.2mの曲物を据えている。

井戸867(図版8) 調査区の南東部で検出した井戸である。掘形は直径1.7mの円形を呈し、深さ1.5mである。井戸枠には直径0.7m、高さ0.7mの底のない桶を用いている。また、底部中央には直径0.45m、高さ0.2mの小型桶を据えている。

井戸840(図版8・28) 調査区の北東部で検出した井戸である。掘形は一部が後世の遺構に壊されているが、直径約2.5mの円形を呈するものと考えられ、深さは1.2mである。井戸枠は一部が土圧で崩壊し、正確な形状は不明であるが、幅0.3m、厚さ0.03m程度の板材を縦方向に用い、これを一辺として平面形が7あるいは8角形に組んでいたものと推測できる。

井戸237（図版8・28） 調査区の南東部で検出した井戸である。掘形は直径約2.3mの円形を呈し、深さ約1.0mである。底部に直径約1.0m、高さ0.2mの曲物が据えられ、これが井戸枠の一部を形成していたものと考えられる。その内側には木製の杭が2～3本打ち込まれており、曲物の固定と土圧を受けるための措置であると考えられる。

井戸2307（図版8・28） 調査区の西部で検出した井戸である。掘形は直径約1.0mの円形を呈し、深さ1.0mである。井戸枠には底を打ち欠いた備前焼の大甕（最大腹径0.8m）を用いている。底部中央には曲物ないし小型の桶が据えられていた痕跡がある。この井戸は建物2197内に位置するが、柱穴との重複がないため前後関係は不明である。なお、備前焼の甕には漆を塗布した帯状の布を貼り付けた補修痕が認められる。井戸枠として利用される以前のものと考えられる。

井戸2687（図版8） 調査区の西部で検出した井戸枠に備前焼の大甕を用いた井戸である。上述の井戸2307と構造がよく似ているが下部に水溜は認められない。掘形は直径1.3mの円形を呈し、深さは0.8mである。この井戸は建物2198と重複し、これに先行する。

土壙933 調査区の東部で検出した東西1.0m、南北1.7mの土壙である。深さは検出面から0.5mである。土器が一括投棄された状態で出土しており、炭化物と共に大量の土師器の皿が出土している。建物1031および1003と重複関係にあり、建物1031よりも新しい。しかし、建物1003とは直接の重複関係はないため前後関係は不明である。

土壙816 調査区の北部で検出した土壙である。掘形は東西2.5m、南北1.5mの方形を呈し、深さ0.35mである。埋土からは土師器の皿が多く出土している。この土壙は建物1007と重複し、これに先行する。

土壙2554（図版27） 調査区のほぼ中央部で検出した土壙である。調査区の境で検出したため一部を未調査のまま残したが、一辺約2.4mの方形を呈するものと考えられ、深さは0.15mである。底部には炭化物の薄い層が認められる。埋土からは土師器の皿が多く出土しており、その大半が完形品やそれに近い状態に復元できる。

土壙2240 調査区の北西部で検出した東西約4.0m、南北6.6mの不定形をした土壙である。深さは0.1～0.2mと浅いため整地層の一部かもしれない。埋土からは大量の土器類が出土している。この土壙は建物2197と重複しており、これに先行する。

溝128 調査区の東部で検出した南北方向の溝である。幅2.5～3.0m、深さ0.3～0.5m、断面は逆台形を呈する。土師器の皿が比較的多く出土している。

溝2178 調査区のほぼ中央で検出した南北方向の溝である。江戸時代の遺構と重複しているために残存状況は良くない。幅2.0m、深さ0.3m程度と考えられる。部分的に土器類が集中して出土している。

溝835・2159 別の名称がついているが同一の溝である。調査区の北端で検出した東西溝で、北肩は調査区外になるため規模は不明である。現状では幅4.0m以上、深さ0.3～0.5mである。底部には一定間隔で凸凹があり、排水よりも水を湛える堀の機能を有するものと考えられる。東端は上述の溝128に接続するものと考えられる。

溝2400 調査区の西端で検出した南北方向の溝である。幅約8.0m、深さ0.5～0.6mである。遺物の出土状況から室町時代に掘削され、一部は江戸時代まで存続していたものと考えられる。底部には凸凹があり、排水よりも水を湛える堀の機能を有するものと考えられる。未確認であるが調査区北端で検出した東西溝835・2159に接続するものと考えている。なお、この溝は東寺西築地の延長線上にある。

溝2290 建物2198の南側で検出した東西溝である。幅1.5m、深さ0.1～0.2mである。建物2198の棟方向に平行で、延長もほぼ揃っている。

溝2237 調査区の北西部で検出した、C字状に巡る溝である。何らかの建造物の基礎と思われるが判然としない。幅0.1～0.3m、深さ0.05m前後である。埋土からは土師器が多く出土している。建物2197と重複しており、これに先行する。

溝2435 調査区の中央部で検出した南北方向の溝である。幅1.0～2.0m、深さ0.25～0.4mである。溝2290と後述する溝2440と重複しており、前者より新しく後者より古い。時期的には桃山時代の可能性がある。

溝2440 調査区の中央部で検出した南北溝である。幅0.3～0.8m、深さ0.25～0.4mである。時期的には桃山時代に属する可能性がある。

(5) 江戸時代の遺構 (図版 3 ・ 29)

建物36 (図版 9 ・ 30) 調査区の北東部で検出した東西 5 間 (6.5m) 、南北 4 間 (5.0m) の礎石建物である。柱穴の一部には上面が平らな礎石や拳大の根石が残存しているものが認められる。柱間は1.0～2.0mと不揃いである。柱穴の掘形は0.3～0.5mの円形ないし隅丸方形を呈し、深さ0.1～0.3mである。建物の東側に1×1間の張り出しがあり、ここに溝58・59を両側溝とする通路が北側から接続している。また、南西隅には後述する建物30への渡殿 (廊下) が取り付く。

建物30 (図版 9 ・ 30) 調査区の北東部で検出した東西 5 間 (10.0m) 、南北 2 間 (4.0m) の礎石建物である。礎石は残存していないが、柱穴に根石があるものが多い。柱間は2.0m前後である。柱穴掘形は一辺0.3～0.5mの隅丸方形ないし円形を呈し、深さ0.1～0.2mである。また、南側柱列に沿って段差が認められ、基壇を伴っていた可能性がある。なお、この建物は上述の建物36、その間にある井戸213などを含めて一連の施設を構成していると考えられる。

建物 5 (図版 10 ・ 30) 調査区の南東部で検出した礎石建物である。身舎は東西 3 間 (5.6m) 、南北 2 間 (4.8m) で南北両面に 1 間 (1.0m) の庇ないし縁が付くと考えられる。身舎の柱穴の 1 つには花崗岩製の礎石 (0.8×0.6m) が残存しているが、柱座などの加工痕は認められない。ほかの礎石は全て抜き取られており、根石などが残存しているにすぎない。柱穴は一辺0.6～0.8mの方形を呈したものとみられ、深さは0.2～0.4mである。庇ないし縁の柱穴は身舎の南北にそれぞれ 1 箇所を確認した。いずれも上面が平らな礎石が残存しており、身舎に比べて小さい。建物の南側には瓦片を 1 列に並べた東西方向の溝があり、雨落溝の痕跡と思われる。建物の南東に瓦で囲った中に礫を詰めた雨枡状の遺構も認められる。

また、この建物の下層では東西2間、南北2間の建物をほぼ同じ位置で検出した。古い建物を壊し、整地した上に、わずかに規模を拡大して建て替えたものと考えられる。

建物33（図版9） 調査区の中央部で検出した東西1間（2.4m）南北1間（2.1m）の礎石建物である。いずれも礎石は残存していないが、掘形内部には拳大の根石が密に詰まった状態で残存している。柱穴掘形は直径1.2mの円形を呈し、深さ0.3m前後である。

建物2131（図版9） 調査区の北部で検出した東西3間（5.0m）南北2間以上（3.6m）の建物で、北側は調査区外に延びる。柱間は1.7m前後である。柱穴には上面が平らな礎石を据えているものが多い。柱穴掘形は直径0.2～0.4mの円形を呈し、深さ0.1～0.2mである。

建物2112（図版10・31） 調査区の南部で検出した東西1間（1.2m）南北1間（1.2m）の礎石建物である。3箇所にも上面が平らな人頭大の礎石が残存している。下部には特殊な掘込み地業が認められる。その手法は建物よりやや広い範囲を約0.4m掘り下げ、中に瓦の破片と粘土層を交互に敷き詰めるものである。これは後述する池2001の一部を埋め立てて築造されているために地盤を安定させるための措置と思われる。また、建物の中心部には直径0.5mの円形で、深さ0.6mの土壌が認められる。地鎮具の埋納土壌とも考えられたが、遺物は出土しなかった。

建物2024（図版10・31） 調査区の南西部で検出した礎石建物である。建物の北端部を検出し、ほかには調査区外へ延びる。後世の攪乱によって判然としないが、建物の北柱列はおよそ東西13間（13.7m）程度と考えられる。さらに西側へは数間（4.0m以上）にわたって延びる付属建物がある。北側には東西5間程度（7.3m）南北1間（2.1m）の張り出し部がある。柱穴は一边0.6m前後の隅丸方形ないし円形で、深さ0.2～0.5mである。礎石は残存しておらず、根石の一部が残っているものが数箇所認められる。下層には掘込み地業が認められ、深さ0.5mにわたって掘り下げられた中に粘質土層と砂礫質土層が交互に敷き詰められている。なお、東端2間分には掘込み地業がおよんでいない。それはこの部分が黄褐色砂泥層（微高地）の範囲にあたり地盤が安定していたためと考えられる。また、西側の付属建物部分は柱列に沿って瓦を敷き詰めた化粧を施しており、一部に人頭大の礎石が残存している。

柵列2328 調査区の南西部で検出した東西方向の柵列である。後述する石垣1と調査区の西端で検出した南北方向の溝2400上層の間にあり、平行する溝2003と共に調査区の西半を南北に区画する性格をもつものと考えられる。数回の建て替えがあったものとみられ、柱穴が重複する箇所も多く、柱間は判然としない。柱穴掘形は直径0.3～0.5mの円形で、深さ0.2～0.4mである。底部に礎石を据えたものも多い。主軸方向は東でやや北に振れる。

溝2003 柵列2328と並行する東西方向の溝である。2時期に分かれ、当初は幅1.5～2.0m、深さ0.3mの規模である。これが埋没後幅0.5～0.7m、深さ0.3mに縮小して新たに開削される。主軸方向は東でやや北に振れる。

排水施設102（図版12） 調査区の南東部で検出した集水枡と暗渠排水路からなる遺構である。集水枡は石と瓦を組み合わせた内径0.75mの石組井戸状を呈し、深さ0.8mである。この上に花崗岩製の蓋を2枚被せ、その隙間から内部に水を落とす構造になっている。排水路は集水枡の底部

より約0.5m高さの側面から南へ延び、丸瓦を抱き合わせた形状の瓦質土管（直径0.15m、長さ0.3m）を並べて暗渠としている。

石垣1（図版11・32） 調査区の中央部で検出した西に面した南北方向の石垣である。0.3～0.5mの石材を1～2段積み上げ、高さ約0.5mの段差を造り出している。石材は花崗岩を用い、隙間や裏込には小石や瓦片を詰めている。石垣の裾には排水溝と考えられる溝63が南流している。

池2001（図版31） 建物2024の北側で検出した東西15.0m、南北15.0mのほぼ正方形の池である。深さは0.5mである。池の東側には排水路と考えられる幅0.5m、深さ0.3mの溝があり、溝2002につながっている。埋土からは大量の土器類のほか金属製品なども出土している。

地鎮土壇64・71・2121・2122・2150・2151・2152（図版11） いずれも土師器の蓋付火消壺（最大腹径約15cm、器高8cm）を埋納した小型土壇である。掘形は0.3～0.5mの円形を呈し、深さ0.1～0.3mである。壺の内部は空洞のまま残り、底部に少量の土砂が認められたが、肉眼の観察では特別な埋納物は認められなかった。これらは調査区の北部、溝63とL字形に曲がる溝2794に囲まれた内側で検出した。溝の曲がり角と溝に沿って3.0～5.0mおきに規則性をもって配置されており、溝に囲まれた土地の地鎮を目的にしたものと推測している。2基が重複している箇所が複数あり、2時期に分かれるものと考えられる。

カマド群57（図版12・32） 調査区の北東部で検出した14基からなるカマド群である。北側に東西4基が並び、やや間おいて10基が弧状に並ぶ。全体としては「U」字を右に倒した形状を呈する。北側に小型のものが、南側にやや大型のものが並んでいる。小型のものは奥行約1.0m、幅0.8mの楕円形を呈し、深さ0.13mである。大型のものは奥行約1.5m、幅1.0m、深さ0.25mである。焚き口はいずれも弧状に並んだ内側に向く。カマドの内面は全体に赤褐色に焼締まり、底部には炭化物や灰が薄く堆積している。削平されているため、上部構造は不明である。

4 . 遺 物

遺物には土器類・瓦類・金属製品・木製品・石製品・土製品などがあり、整理箱に1099箱出土した。器種別には瓦類の出土量が最も多く、土器類がこれに次ぐ。時代は古墳時代から江戸時代におよぶが、表2に示したように江戸時代のものが約半数を占め、次いで鎌倉時代から室町時代のものが多い。

(1) 土 器 類

土器類には土師器、須恵器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、磁器（青磁・白磁・染付）などがある。以下では、各期の主要な遺構の出土土器について概観する。

井戸993（図版13・33-1～20） 多量の瓦や窯体と共に土師器、須恵器、瓦器、灰釉陶器、磁器などが出土した。特に井戸枠内下層からは完形に近い土師器皿を主体とする土器群を検出した。これらは井戸の廃棄段階で一括投棄されたものと考えられる。土師器には口縁部が屈曲する小型

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代	古式土師器・須恵器	1箱		1箱	
平安時代	土師器・須恵器・東播系須恵器・瓦器・焼締陶器・灰釉系陶器・輸入磁器	155箱	土師器48点、東播系須恵器3点、瓦器3点、灰釉系陶器2点、輸入磁器1点	6箱	51箱
	軒丸瓦・軒平瓦・平瓦・丸瓦・鬼瓦・鷗尾・文字瓦		軒丸瓦3点、軒平瓦13点、鬼瓦10点、鷗尾3点、文字瓦6点、道具瓦1点	3箱	89箱
	その他			1箱	
鎌倉～室町時代	土師器・須恵器・東播系須恵器・瓦器・施釉陶器・焼締陶器・輸入磁器	399箱	土師器204点、東播系須恵器3点、瓦器18点、施釉陶器9点、焼締陶器2点、輸入磁器7点	92箱	141箱
	軒丸瓦・軒平瓦・平瓦・丸瓦・鬼瓦・文字瓦		軒丸瓦10点、軒平瓦11点、文字瓦3点	34箱	111箱
	その他		瓦質土製品1点、滑石製板状製品1点	1箱	
江戸時代	土師器・施釉陶器・焼締陶器・磁器	544箱	土師器11点、瓦器1点、施釉陶器19点、焼締陶器1点、磁器12点、塩壺4点、その他1点、墨書土器1点	122箱	241箱
	軒丸瓦・軒平瓦・平瓦・丸瓦・鬼瓦・文字瓦			36箱	137箱
	その他		金属製品7点、木筒1点	3箱	
計		1099箱	420点 (30箱)	299箱	770箱

皿(1～6)、口縁部が外反する小型皿(7～12)・大型皿(13～16)、高台付皿(17)がある。瓦器椀(18)は摩滅が著しく調整等は不明であるが、口縁端部内面に沈線が巡る。灰釉陶器椀(19)は口縁端部を強くナデて外反させる。白磁椀(20)は底部のみで、高台は削り出しにより整形する。 期新段階に属する。

土壙964(図版13・33-21～26) 土師器皿のみが出土した。口縁部が屈曲する小型皿(21～24)、口縁部が外反する大型皿(25・26)がある。 期新段階に属する。

土壙196(図版13-27～31) 土師器、須恵器、瓦器、灰釉系陶器、白磁と中心飾りに「左寺」銘のある軒平瓦のほか、瓦などが出土した。土師器皿のみ図示した。口縁部が屈曲する小型皿(27)、口縁部が内弯する小型皿(28・29)・大型皿(30・31)がある。 期古段階に属する。

井戸839(図版13-32～35) 土師器、須恵器のほか滑石製石鍋片や瓦が出土した。土師器には口縁部が内弯する小型皿(32)・大型皿(33・34)がある。須恵器には糸切りによる平底の鉢(35)があり、口縁端部をつまみ上げる。 期古段階に属する。

井戸293(図版13-36～42) 土師器、須恵器、瓦器、磁器が瓦などと共に出土している。土師器には口縁部が内弯する小型皿(36)・大型皿(37・38)と受け皿形の小型皿(39)、高杯脚柱部(41)がある。瓦器椀(40)は大和型のもので底部は欠損する。須恵器甕(42)は体部外面に平行条線による叩き、内面は横ナデを施す。 期古段階に属する。

土壙277(図版13-43～57) 土師器、須恵器、瓦器、灰釉系陶器、磁器が瓦や窯体片などと共に出土した。土師器には口縁部が内弯する小型皿(43～50)・大型皿(51～54)がある。瓦器椀(55)は大和型のもので、体部外面にはヘラミガキを施さない。灰釉系陶器の椀(56)はいわゆる

る山茶椀で口縁部は丁寧にナデて仕上げ、底部は糸切りの後高台を貼り付ける。釉はほとんど掛かっていない。須恵器にはいわゆる東播系の片口鉢（57）があり、口縁端部を拡張せず器壁と垂直をなす。 期中段階に属する。

土壙2554（図版14・33-58～76） 多量の土師器皿のほか、東播系須恵器、瓦器、輸入磁器、瓦などが少量出土した。土師器皿はほとんどが完形で、赤色系小型皿（58～63）・大型皿（64～68）と白色系小型皿（69・70）・大型皿（71～76）があり、赤色系と白色系の割合はおおよそ3対1で赤色系が多い。赤色系には体部が外反するものと内弯するものがあり、口縁部下端の稜はあまり目立たないものが多い。白色系小型皿はいわゆるヘソ皿のみである。 期古段階に属する。

溝2237（図版14-77～83） 土師器、東播系須恵器、瓦器、大和産火鉢、施釉陶器、焼締陶器、滑石製石鍋や瓦などが出土した。土師器皿のみが図示できた。赤色系大型皿（77・78）と白色系小型皿（79・80）・大型皿（81～83）があり、同じ 期古段階の土壙2554と比べると赤色系・白色系共に器壁が厚くやや後出の傾向であろうか。

溝2400下層（図版14・33-84～104） 土師器、東播系須恵器、瓦器、大和産火鉢、焼締陶器、施釉陶器、輸入磁器などがあり、砥石や多量の瓦や窯体も出土している。土師器皿は赤色系小型皿（84～88）・大型皿（89～92）、白色系小型皿（93～97）・大型皿（98～101）があり、その割合はおおよそ1対2で白色系が多い。施釉陶器瀬戸美濃産の小型高杯（102）は杯部外面に18枚の蓮弁を上下二段交互にあしらい、蓮華を模している。脚部は中実、底面は平坦で糸切り痕を残す。仏具として用いられたと考えられる。東播系須恵器鉢（103）は片口の鉢で、口縁端部が上下に拡張される。瓦器鍋（104）は口縁端部が尖って内傾する。 期古段階に属する。

溝2178（図版14-105～116） 土師器、東播系須恵器、瓦器、施釉陶器、ほかに瓦や窯体が出土している。土師器皿は白色系小型皿（105～108）・中型皿（109～111）・大型皿（113～115）があり、小型皿はヘソ皿である。赤色系には大型皿（112）があり、白色系に比して少ない。瓦器片手鍋（116）は把手に直交する二方向に注口を設ける。 期中段階に属する。

溝2290（図版14-117～123） 土師器、瓦器、大和産火鉢、東播系須恵器、焼締陶器、施釉陶器、輸入磁器、銅製品・鉄釘や瓦が出土している。土師器皿は赤色系が少なく、白色系が圧倒的に多い。白色系のみ図化できた。小型のヘソ皿（117・118）、中型皿（119・120）、大型皿（121・122）、口径が16cmを超える超大型皿（123）がある。 期中段階から新段階に属する。

溝128（図版14-124～128） 土師器、瓦器、東播系須恵器、施釉陶器、輸入磁器、瓦、窯体片、埴、砥石などが出土した。土師器皿は白色系のヘソ皿（124～126）、大型皿（127）がある。赤色系は少量である。輸入磁器の青磁椀（128）は削り出し高台で口縁部を欠損する。 期新段階に属する。

土壙2240（図版15-129～148） 土師器、瓦器、大和産火鉢、東播系須恵器、焼締陶器、施釉陶器、輸入磁器、瓦が出土した。土師器は赤色系小型皿（129）・大型皿（130～133）がある。大型皿は口径が9～10cmのものと12cm前後のものがある。白色系は小型のヘソ皿（134～

139)・小型皿(140・141)と大型皿は口径が12~13cmのもの(142・143)、16cm前後のもの(144)、さらに20cmを超えるもの(145)がある。白色系と赤色系の割合はおおよそ2対1で、白色系の中では小型のヘソ皿が過半数を占める。なお、131・141は底部を除く内外面に煤が付着する。施釉陶器瀬戸美濃産のものには小皿(146)と筒形香炉(147)がある。小皿は底面に糸切り痕を残す。筒形香炉は口縁端部を内外に拡張させ、上端に内傾する面を持たせる。土師器釜(148)は羽釜を模した小型のもので、口縁外面やや下がった位置に断面台形の凸帯を巡らせる。期古段階に属する。

土壙933(図版15-149~164) 土師器、瓦器、東播系須恵器、焼締陶器、磁器がある。ほかに瓦や砥石が出土している。土師器皿のみ図化できた。土師器皿は赤色系が極く少量あり、ほとんどが白色系である。小型のヘソ皿(149~156)・小型皿(157~160)、大型皿は口径が12~13cmのもの(161~163)と、20cm前後のもの(164)がある。期古段階に属する。

溝2159(図版15-165~180) 土師器、瓦器、大和産火鉢、東播系須恵器、焼締陶器、施釉陶器、輸入磁器、瓦や埴、窯体片などが出土した。土師器皿は赤色系小型皿(165・166)・大型皿(167・168)、白色系は小型のヘソ皿(169~171)・小型皿(172)、大型皿は口径が10~12cmのもの(173・174)と15cm以上のもの(175)がある。赤色系は白色系に比べると少量である。白磁皿(176)は平底の皿で、口縁端部の釉を掻き取ったいわゆる口禿である。瓦器には小型の三足釜(177)と鍋(178)がある。大和産火鉢(179)は直立した口縁の外側に珠紋が巡る。東播系須恵器鉢(180)は口縁端部を上下に拡張する片口の鉢である。期古段階から中段階に属する。

溝835(図版15-181~197) 土師器、瓦器、大和産火鉢、東播系須恵器、焼締陶器、施釉陶器、輸入磁器、瓦や埴、砥石などが出土した。土師器皿には赤色系小型皿(181)・大型皿(182・183)、白色系小型のヘソ皿(184~187)・小型皿(188)・中型皿(193)・大型皿(189~192)があり、白色系が多い。施釉陶器瀬戸美濃産の鉄釉香炉(194)は袴腰形で底面に糸切り痕を残す。鉄釉椀(195)はいわゆる天目椀で、体部下半にヘラケズリを施し高台を削り出す。瓦器鍋(196)は炭素の吸着がほとんどなく、灰白色を呈する。東播系須恵器鉢(197)は口縁端部の上下への拡張が著しくなっている。期古段階から中段階に属する。

井戸854(図版16-198~202) 土師器、瓦器、輸入磁器、瓦などが出土した。土師器には白色系の小型ヘソ皿(198)・小型皿(199)・大型皿(200)がある。輸入磁器の青磁皿(201)は高台もふくめ全面に明緑灰色の釉を施すが、底部高台内を蛇の目状に拭き取っている。瓦器釜(202)は外面全面に煤が付着している。期中段階から新段階に属する。

土壙816(図版16・34-203~221) 土師器、瓦器、施釉陶器、東播系須恵器、焼締陶器、輸入磁器、瓦、滑石製石鍋、鉄釘などが出土した。土師器皿には赤色系小型皿(203・204)、白色系の小型ヘソ皿(205~207)・小型皿(208~212)・大型皿(214~220)があり、赤色系は極く少量である。白色系の大型皿には内面底部と口縁部の境に圈線がみられるようになる。輸入磁器には白磁皿(213)と青磁椀(221)がある。213は口縁内外面のみ施釉し、高台畳付に4箇所を挿し入れる。221は高台内以外に比較的厚く釉を施す。期新段階に属する。

溝2178下層（図版16・34-222～247） 土師器、瓦器、大和産火鉢、施釉陶器、東播系須恵器、焼締陶器、輸入磁器、瓦、窯体片、砥石などが出土した。土師器皿は赤色系小型皿（222～224）・大型皿（225）、白色系小型のヘソ皿（226・227）・小型皿（228～231）・大型皿（232～240）があり、圧倒的に白色系が多い。施釉陶器は瀬戸美濃産の鉄釉小壺（241）と灰釉平椀（242）がある。241は底部に糸切り痕が残る。242は底部高台内に「中」の墨書がある。輸入磁器の青磁筒形香炉（243）は三方に脚が付く。瓦器には釜（244）と大和産火鉢、いわゆる奈良火鉢（245～247）がある。244は口縁端部からあまり下らない位置に、断面三角形の低い凸帯を巡らせる。245・246は平面円形で体部が内弯する浅鉢、外面に2個一組の花紋のスタンプを押捺する。247は平面円形で平坦な底部から内弯する体部の風炉で、三方に脚が付く。 期新段階に属する。

井戸840（図版17-248～255） 土師器、瓦器、大和産火鉢、施釉陶器、東播系須恵器、焼締陶器、輸入磁器、瓦、埴、砥石、凝灰岩片などが出土した。土師器皿は赤色系大型皿（248）、白色系小型のヘソ皿（249）・小型皿（250）・大型皿（251～253）がある。赤色系の248は内面のみをナデて仕上げる歪んだ粗製品である。白色系の口径15cmを超える大型皿253は内面に圏線が巡る。瓦器鍋（254）は口縁部内面の受部が小さい。施釉陶器には瀬戸美濃産の平椀（255）がある。高台は削り出し、畳付に糸切り痕が残っており、糸切りののち回転削りを施して浅い高台内を作っている。 期中段階に属する。

室101（図版17・34-256～284） 土師器、瓦器、大和産火鉢、施釉陶器、東播系須恵器、焼締陶器、輸入磁器、瓦、埴、砥石、凝灰岩片、鉄製品など多量の遺物が出土した。土師器皿は赤色系小型皿（256～260）・大型皿（261・262）、白色系小型皿（263～272）・大型皿（273～276）があり、その割合は圧倒的に白色系が多く赤色系は少ない。白色系の小型のヘソ皿はみられなくなる。土師器小型鉢（277）は精良な胎土で薄く仕上げられている。底部を欠くが平底になると考えられる。青磁椀（278）は蓮弁椀で、見込みには草花紋を施す。施釉陶器には瀬戸美濃産のものが多く、279は小型花瓶の底部で底面には糸切り痕を残す。焼締陶器には備前産、信楽産、常滑産があり、281は口縁部を大きく上方へ拡張する備前産の擂鉢で、著しく焼け歪んでいる。瓦器は多様である。280は平底の皿状のもので、外面には粗いハケメ、内面は丁寧なヘラミガキを施して平滑に仕上げている。282は箍を三条巡らせて木桶を模したもので、平底に三方に脚が付くが欠損する。大和産火鉢はいずれも平面円形の深鉢で、体部が内弯するもの283は外面に縦方向のヘラミガキを施し平滑に仕上げる。大型のもの284も体部外面に縦方向のヘラミガキを施し、底部との境に細い凸帯を巡らせ、底部には三方に短い脚が付く。 期中段階に属する。

溝2440（図版17-285～290） 土師器、瓦器、大和産火鉢、施釉陶器、東播系須恵器、焼締陶器、輸入磁器、瓦、窯体片、鉄釘などが出土した。土師器皿は赤色系小型皿（285・286）と白色系小型皿（287・288）・大型皿（289）がある。白色系皿は内面に圏線がみられる。瓦器羽釜（290）は大型のもので、口縁端部は外傾する段を持ち、厚くてしっかりした鏝を付ける。 期新段階に属する。

井戸519（図版17-291～296） 土師器、瓦器、大和産火鉢、施釉陶器、焼締陶器、輸入磁器、

瓦、窯体片などが出土した。土師器皿は白色系小型のヘソ皿（291）・小型皿（292）・中型皿（293～295）がある。赤色系も少量あるが図化できなかった。瓦器には口縁部の屈曲が弱い鍋（296）がある。期新段階に属する。

溝2435（図版17-297～300）土師器、瓦器、大和産火鉢、施釉陶器、焼締陶器、瓦、砥石などが出土した。土師器皿は赤色系小型皿（297）、白色系小型皿（298）があり、白色系が主体を占める。土師器鍋（299）は浅い半球形の体部に口縁部が屈曲して開く。体部外面には煤が付着する。焼締陶器には常滑産・備前産・信楽産・丹波産などがある。備前産の播鉢（300）は口縁部が大きく上方に拡張される。期古段階に属する。

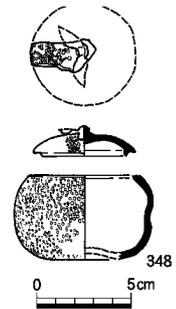


図7 蜜柑形蓋物
実測図（1：4）

池2001（図版18・35-301～347、図7-348）池の埋土から土師器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦、埴、金属器、砥石、硯、窯体片など多種多様な遺物が出土した。土師器皿は赤色系の小型皿（301・302）、白色系の小型皿（303・304）・大型皿（305・306）と口径が16cmの超大型皿（307）がある。白色系の大型皿と超大型皿は内面に工具を用いた明瞭な圏線が施される。土師器にはほかに、厚手の小型椀（308）や小型壺いわゆるツボツボ（309）があり、鍋（338）は浅い半球形の体部から屈曲して口縁が開く。磁器は肥前産で白磁端反椀（310・311）は無紋であるが、内面に内型による浮彫紋のあるものもある。白磁丸椀（312）は口縁端部に口銹を施すもので、同形の丸椀は少なくともこのほかに口銹のもの7個体、口銹のないものが3個体ある。染付には各種の椀（313～316）、輪花小皿（317）、椀蓋（318）、合子蓋・身（319・320）、皿（321）などがある。314の高台内には銘の一部が残っており、「大明成化年製」銘と考えられる。施釉陶器には京焼系、唐津産、瀬戸美濃産、産地不明のものがある。京焼系のものには丸茶碗（322）、薄茶椀（323・324）、方形の香炉・火入れ（325）、輪花鉢（327）、鉄釉把手付半球椀（328）、蜜柑形蓋物（図7-348）などがある。322・324は肥前産のいわゆる京焼風陶器で、丸椀は外面に、薄茶椀は見込みに同系統の紋様が描かれトチン痕はない。これと同様の薄茶椀は少なくとも7個体ある。323は口縁部内面の一箇所草花紋様を描き、見込みにはトチン痕が3箇所残る。紋様の意匠が異なる同様の薄茶椀がほかに少なくとも6個体ある。また、トチン（326）は円板状の本体の三方に円錐形の小さな脚が付き、本体は上面下面共に糸切り痕を残す。同様のものが3個体あり供膳具として利用されたものと思われる。348は蜜柑を模した器で外面をクシ状工具で刺突して外皮を表現し、内外全面に黄釉を施す。扁平な球形の身は外面中程を四方向から指で押さえて凹ませる。蓋の摘みは蜜柑のヘタを表している。唐津産のものには、いわゆる刷毛目椀（329・330）、三島手椀（331）、鉄釉輪禿皿（332）などがある。刷毛目椀は回転を利用した渦巻状の紋様が内外に施されるもので、朝顔形椀と丸椀があり、丸椀は少なくとも10個体ある。瀬戸美濃産のものには、小型壺（333）、蓋（334）、小型皿（335）、灰釉系の丸椀（336）、平椀（337）などがある。333はツボツボで、鉄釉を施す。334は志野の水指の蓋で、長石釉を上面にのみ施す。335は平面扇形を呈し、底部には三方に短い脚が付き、底部外面および脚を除く全体に灰釉を施す。3個体ある。灰釉系の丸椀にはやや胎土が粗く厚手のもの10個体と密で薄手のもの2個体がある。

産地が不明なものとしては、二方向に紐状把手を付ける両手鍋（346・347）とその蓋（345）がある。いずれも緻密な胎土で、褐色の釉を施す。両手鍋は底部に短い脚が三方に付き、口径が13cmの小型品と20cmの大型品がある。塩壺も多く出土した。花焼塩壺および蓋（341・342）は精良な胎土で作られ、蓋の上面には「深草・砂川・権兵衛」の刻印がある。焼塩壺および蓋（343・344）は粗製のもので、壺は板作り成形によるもので体部外面には「泉州麻生」（内側二段角）の刻印がある。瓦器火鉢（339）は腰の張る体部に口縁部は水平に張り出し、底部は「八」字状に踏ん張る高台が付く。焼締陶器には信楽・伊賀・丹波・備前・常滑など各産地の多様な器形がある。片口の播鉢（340）は明石あるいは堺産と思われる橙色の胎土のもので、内弯気味に立ち上がる体部に口縁部は上下に拡張し、内面には金属製の工具で鋭い播り目が施される。ほかに図示できなかったが、南蛮系と思われる薄手の四耳壺なども出土している。この池2001出土の土器類で特に注意されるのは白磁丸椀、京焼薄茶椀、唐津産丸椀などにみられるように、椀類においてそれぞれ10脚程度のセットが認識されることであろう。池が埋められるに際して一括投棄されたと考えられる。 期新段階に属する。

（2）瓦 類

瓦類には軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、鬼瓦、鴟尾、道具瓦などがあり、緑釉瓦も若干出土している。瓦類全体においては圧倒的に丸瓦・平瓦が多く、なかには完形のものもあるが破片が大多数を占めている。同時代の遺構に伴って出土したものは少なく、大半が後世の遺構に混入した形での出土である。

特徴的なのは、瓦窯壁に用いたと考えられる半截された平瓦が何枚も溶着したものや、焼成中に焼け歪んだり火膨れした個体が大量に出土していることであろう。これらは主に調査区南東部の平安時代末期から鎌倉時代の整地層から集中して出土している。おそらく、東寺旧境内で操業していた平安時代中期の瓦窯を壊して、低い北西側を埋立て整地するのに利用されたものと考えられる。

軒丸瓦・軒平瓦については時期ごとに瓦当紋様別の数量を表3に示した。既往の調査で出土した瓦当紋様と同範あるいは同紋のものは、それが掲載されている文献の略称と遺物番号を組合せて表の備考欄に表記した。本文中でもそれを援用する。本報告では既往調査で出土していないと思われるもののうち、主なものについて図示した。以下では、それらを中心に概観する。

軒丸瓦（図版19・36・37-349～361） 平安時代前期から中期のものはいずれも蓮華紋である。図示した複弁八弁蓮華紋（350）は一本造り成形で、ほかは瓦当部貼付け成形によっている。単弁十六弁蓮華紋（349）は瓦当面の損傷が著しい。平安時代後期のものには蓮華紋と巴紋がある。巴紋はいずれも右巻きで、三巴紋（351）は播磨産である。鎌倉時代前期には文覚上人が東寺を再建したときに用いたとされる播磨林崎三本松窯産の複弁八弁蓮華紋があり、いずれも同紋系であるが範の種類が多様である。鎌倉時代のものは蓮華紋と巴紋があり、蓮華紋の2種（352・353）はいずれも小型瓦で、中房にある銘は摩滅して判読できない。巴紋はいずれも右巻きの三巴紋

表3 軒瓦分類表

種類	時期 (時代)	瓦当紋様	紋様・技法	出土 数	備考	遺物 番号		
軒丸瓦	平安時代 前～中期	蓮華紋	複弁八弁蓮華紋	瓦当部貼付け成形	2	* 東宝記10		
				”	8	* 東宝記10～13		
				”	1	* 東宝記15		
				一本造り成形	3	* 平古106同紋	350	
		単弁十六弁蓮華紋	瓦当部貼付け成形	1	* 平古55同紋	349		
		複弁蓮華紋	不明	2				
		蓮華紋	不明	1				
	平安時代 後期	蓮華紋	複弁八弁蓮華紋	瓦当部貼付け成形	1	* 東宝記35 遠江湖西窯産		
				単弁蓮華紋	”	1	播磨産	
				蓮華紋	不明	1		
		巴紋	三巴紋（右巻き）	瓦当部貼付け成形	3	播磨産	351	
			巴紋（右巻き）	不明	1	山城産		
	鎌倉時代 前期	蓮華紋	複弁八弁蓮華紋	瓦当中央に箔傷	1	* 東宝記77		
				瓦当部貼付け成形		文覚上人東寺再建瓦		
				珠紋が弁間に位置	6	* 東宝記75～84		
				瓦当部貼付け成形		文覚上人東寺再建瓦		
				珠紋が弁中央に位置	11	* 東宝記75～84		
				瓦当部貼付け成形		文覚上人東寺再建瓦		
				瓦当部貼付け成形	14	* 東宝記75～84		
						文覚上人東寺再建瓦		
				蓮子が弁中央に位置 内区紋様が平坦	6	* 東宝記85同紋		
瓦当部貼付け成形					文覚上人東寺再建瓦			
内区紋様平坦で中房盛り上がる	4	* 東宝記86						
瓦当部貼付け成形		文覚上人東寺再建瓦						
内区紋様平坦	10	* 東宝記87						
瓦当部貼付け成形		文覚上人東寺再建瓦						
内区紋様平坦	6	* 東宝記85か87						
瓦当部貼付け成形		文覚上人東寺再建瓦						
鎌倉時代	蓮華紋	複弁六弁蓮華紋	小型瓦中房銘不明	1		352		
			複弁八葉蓮華紋	1		353		
	巴紋	三巴紋（右巻き）	内区が盛り上がる	2		354		
			瓦当部貼付け成形					
			珠紋が二連・三連にまとまる	2		355		
			珠紋が界線に挟まれる	1		356		
			珠紋が大きく密	1		357		
			不明	7				
鎌倉～ 室町時代	巴紋	三巴紋（右巻き）	瓦当部貼付け成形	9		358		
			不明	1		359		
			不明	1		360		
			不明	88				
			「東寺」銘紋	4		361		
中・近世	巴紋		不明	28				
			不明	1	道具瓦（小型瓦）			

種類	時期 (時代)	瓦当紋様		紋様・技法	出土 数	備考	遺物 番号					
軒丸瓦	中・近世	梅鉢紋		不明	4							
				不明	1	道具瓦 (小型瓦)						
		三鈷紋		不明	1							
		小菊紋		不明	10	道具瓦 (葺瓦)						
		不明		不明	3							
軒平瓦	平安時代 前期	唐草紋	外行唐草紋	中心飾り「C」字対向	4	* 平古55同紋						
				緑釉瓦、曲線顎	1	* 東宝記104同紋						
	平安時代 前～中期	唐草紋	偏行唐草紋	外行唐草紋	不明	1		362				
					中心飾り「C」字対向	1	遠江湖西窯産					
					”	1		363				
					中心飾り「康和三年」銘	1		386				
					不明	3						
	平安時代 中期	唐草紋	外行唐草紋	外行唐草紋	中心飾り「左寺」銘	9	* 東宝記105	387				
					”	27	* 東宝記107	388				
					”	8	* 東宝記108					
					”	6	* 東宝記105か108					
	平安時代 後期	唐草紋	外行唐草紋	外行唐草紋	中心飾り半截花紋 凸面縄叩き成形	2	* 東宝記137 讃岐産					
					”	1	* 東宝記138 讃岐産					
					凸面縄叩き成形	1	* 東宝記148 讃岐産	364				
						内行唐草紋	1	* 東宝記143 山城産				
						外行唐草紋	1	* 東宝記156 山城産				
						唐草紋	5	山城産				
						外行唐草紋	1	丹波産	365			
						外行唐草紋	2	丹波産				
						内行唐草紋	1	丹波産	367			
						外行唐草紋	中心飾り「C」字下向き	1	播磨産	368		
							中心飾り「C」字上向き 瓦当部つつみ込み成形	1	播磨産	369		
						唐草紋	不明	5				
						半截花紋	半截花紋	顎部貼付け-凸面・裏面縄叩き成形	瓦当部つつみ込み成形	1	播磨産	370
									瓦当部つつみ込み成形	1	播磨産	
						幾何学紋	鋸歯紋	瓦当部折曲げ-凸面・裏面縄叩き成形	1	丹波産	366	
						剣頭紋	剣頭紋 (陰刻)	瓦当部折曲げ成形	3	山城産		
						巴紋	連巴紋	二つ巴 (右巻き)	2	* 東宝記198同紋 播磨産	371	
	鎌倉時代 前期	唐草紋	偏行唐草紋	外行唐草紋	珠紋が大小で不規則に配置 顎部貼付け成形 凹形調整台圧痕のあるものあり	3	* 東宝記184					
					中心飾り「C」字対向	3	* 東宝記190 文覚上人東寺再建瓦					

種類	時期 (時代)	瓦当紋様	紋様・技法	出土 数	備考	遺物 番号	
軒平瓦	鎌倉時代 前期	唐草紋	外行唐草紋	中心飾り「C」字対向	5	* 東宝記186同紋	
				中心飾り「C」字対向 珠紋が大きく二連・三連にまとまる 瓦当部貼付け	3	* 東宝記186同紋	373
				中心飾り「C」字対向 紋様簡略化され内区狭い	6	* 東宝記186同紋	
				中心飾り「C」字対向 珠紋が二連・三連にまとまる 顎部貼付け	1	* 東宝記186同紋	376
				中心飾り「C」字対向 左端外区の唐草が異なる	1	* 東宝記186同紋	
				中心飾り「C」字対向	1	* 東宝記191同紋 文覚上人東寺再建瓦	
				中心飾り「C」字対向	5	* 東宝記196 文覚上人東寺再建瓦	
				中心飾り「C」字対向 支葉二枚	9	* 東宝記187～196 文覚上人東寺再建瓦	
				中心飾り「C」字対向 支葉三枚	26	* 東宝記187～196 文覚上人東寺再建瓦	
				中心飾り「C」字対向 右「C」字内に珠紋 顎部貼付け	7	* 東宝記187～196 文覚上人東寺再建瓦	374
				中心飾り「C」字対向 右上部と右下珠紋に範傷	1	* 東宝記187～196 文覚上人東寺再建瓦	375
				中心飾り「C」字対向 左脇区に範傷	2	* 東宝記187～196 文覚上人東寺再建瓦	
				中心飾り「C」字対向	19	* 東宝記187～196 文覚上人東寺再建瓦	
				中心飾り「C」字対向 珠紋中央が三連でほかは二連 瓦当部貼付け成形 顎部に凹形調整台の圧痕 狭端部に釘穴 平瓦凸面狭端部にハナレズナ附着 瓦当部貼付け	14	* 東宝記197	
					1	* 栢杜・方形堂出土軒 平瓦 大和産	372
				鎌倉時代	唐草紋	外行唐草紋	中心飾り「C」字上向き 顎部に凹形調整台の圧痕のあるもの多い 瓦当面に布目痕のあるものもある
顎部貼付け成形	2	* 東宝記185					
珠紋が不規則に配置 瓦当部貼付け成形 顎部に凹形調整台の圧痕	2		378				
不明	3						
鎌倉～ 室町時代	唐草紋	外行唐草紋	中心飾り花紋	1	* 東宝記199		
			中心飾り花紋	3		381	

種類	時期 (時代)	瓦当紋様		紋様・技法	出土 数	備考	遺物 番号
軒平瓦	鎌倉～ 室町時代	唐草紋	外行唐草紋	中心飾り三葉形 瓦当部貼付け成形 顎部に凹形調整台の圧痕	14		379
				平瓦凸面中央に凸帯 凹面両側面に立ち上がり 狭端部に釘穴	6	* 八幡宮26	380
				中心飾り花紋 顎部に凹形調整台の圧痕 狭端部に釘穴 平瓦凸面狭端部にハナレズナ付着	2		382
				瓦当貼付け成形	2		
				中心飾り花紋 瓦当貼付け成形 顎部に凹形調整台の圧痕	2		
				中心飾り「C」上向き 瓦当貼付け成形 顎部に凹形調整台の圧痕	2		
				顎部貼付け成形	8		
				唐草紋	不明	21	
				近世	唐草紋	唐草紋	不明
	※備考中の*は以下の報告書に記載されている遺物番号を示す 東宝記—鈴木久男ほか「東寺出土瓦資料」『東寺の歴史と美術 新東宝記』真言宗総本山東寺 1995年 平古—『平安京古瓦図録』平安博物館編 雄山閣 1977年 栢社—杉山信三ほか『栢社遺跡調査概報』鳥羽離宮跡調査研究所 1974年 八幡宮—上村和直「平安京左京九条一坊・東寺旧境内1」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1993年						

である（354～357）。鎌倉時代から室町時代のものには巴紋と「東寺」銘紋がある。巴紋はいずれも右巻きの三巴紋で多種にわたるが小片が多く、うち3種（358～360）を図化した。「東寺」銘紋（361）は中央に比較的細い文字の「東寺」銘を縦に配し、外区には珠紋が巡る。中・近世のものには巴紋・梅鉢紋・三鈷紋・小菊紋などがあり多様である。巴紋・梅鉢紋には小型瓦があり、小菊紋は小型の棟飾りに用いられる薨瓦である。

軒平瓦（図版20・21・37～40・362～382・386～388） 平安時代前期のものには外行唐草紋のものがあり、緑釉瓦が1点ある。平安時代前期から中期のものには外行唐草紋と偏行唐草紋がある。偏行唐草紋（362）は残存状況が悪く、全容は不明である。外行唐草紋には中心飾りが「C」字対向、「康和三年」銘（386）、「左寺」銘（387・388）のものがある。中心飾りが「C」字対向のうち363は向き合う「C」字の間に点が配されるもの、また「左寺」銘はいずれも逆字に配されるものである。なお「左寺」銘軒平瓦は前述の平安時代末期から鎌倉時代の整地層に伴って多くが出土しており調査区周辺に営まれた瓦窯で生産されていたものと考えられる。平安時代後期には唐草紋・半截花紋・幾何学紋・剣頭紋・連巴紋があり、山城・丹波・播磨・讃岐の各産地のものがみられ、紋様の種類と産地が多様化する。讃岐産のものには外行唐草紋があり、いずれも凸面縄叩き成形がなされている（364）。山城産には外行唐草紋・内行唐草紋・剣頭紋があり、瓦当

部の成形技法は唐草紋が半折曲げ成形、剣頭紋が折曲げ成形である。丹波産には外行唐草紋(365)・内行唐草紋(367)・半截花紋・幾何学紋があり、顎部を貼付けて、あるいは瓦当部を折曲げて凸面(裏面)を縄叩き成形する。幾何学紋(366)はいわゆる鋸齒紋とでもいべき紋様である。播磨産には外行唐草紋・半截花紋(370)・連巴紋があり、瓦当部つつみ込み成形のものが多い。外行唐草紋のものには中心飾りが「C」字下向きのもの(368)と上向きのもの(369)があり、連巴紋(371)は右巻きの二巴を中央に三連、両脇に二連を配したものである。鎌倉時代前期には偏行唐草紋と外行唐草紋がある。外行唐草紋は東宝記186同紋、187～196同紋、197同紋、栢杜方形堂出土軒平瓦同紋(372)の4種に大別できる。東宝記186同紋のものには何種類か確認でき、紋様の明瞭なもの(373)と簡略化されたもの(376)などがある。東宝記187～196は文覚上人が東寺を再建したときに用いたとされる播磨林崎三本松窯産のもので、中心飾りの右「C」字内に珠紋があるもの(374)や瓦当右上部と右下珠紋に范傷のあるもの(375)など細部の違いや范傷などで少なくとも8種に分かれる。鎌倉時代のものには外行唐草紋がある。中心飾りが「C」字上向きのもの(377)はすべて同范で、顎部に凹形調整台の圧痕があるものが多い。この顎部に凹形調整台の圧痕を残す個体は鎌倉時代から室町時代にかけて多くみられる。界線がなく珠紋が不規則に巡るもの(378)も同様に顎部に凹形調整台の圧痕がある。鎌倉時代から室町時代のものには唐草紋があり、外行唐草紋には中心飾りが三葉形(379)、花紋(381・382)などがある。379・382には顎部に凹形調整台の圧痕があり、382は平瓦狭端部に釘穴が貫通しており、また凸面狭端部にハナレズナが付着している。八幡宮26同范の380は平瓦凸面中央に凸帯、凹面両側面に立ち上がりが設けられた、いわゆる掛瓦で、狭端部に釘穴が貫通している。近世のものには多種多様な唐草紋がある。

鬼瓦(図版40-389～398) 鬼瓦はすべて破片で、22点確認した。うち平安時代のものと考えられるのが10点あり、図版に掲載した。10点のうち、390と391、393と396、392と398はそれぞれ同一個体と考えられ、いずれも周縁部分の破片である。390・393は珠紋帯の外側に鱗状の表現がみられるが、そのほかのものは珠紋帯が最も外側となっている。397は右辺と下辺が残存しており、表面に施された縦・横の線は粗く指でナデ引いたものである。395は竹管状工具による珠紋が巡る。

鴟尾(図版40-400～402) 鴟尾と考えられるものは3点あり、いずれも小片でどの部位に当たるか確定できない。402は表面に厚く緑釉が施されるもので、背部辺りの破片と考えられる。401は草紋の浮彫が施されており胴部の破片であろうか。400には剣頭紋が施されている。

道具瓦(図版40-399) 道具瓦は20点ほどあり、いずれも破片が小さく用途不明のものが多い。399も用途は不明であるが、縦方向に細長い右巻きの三巴紋が施される。

緑釉瓦 緑釉瓦が少量出土している。いずれも素地は粗く白っぽい胎土のものである。大半は平坦で幅の狭いいわゆる熨斗瓦で、上面の一部から側端面にのみ緑釉が塗られている。ほかに軒瓦の破片や棟瓦と考えられるものもある。

文字瓦(図版21・22・41・42・44-383～385・403～407・417、図8) 平瓦・丸瓦の凹



図8 和歌拓影(1:3)

面・凸面に文字や記号が刻まれた瓦は比較的多く出土している。刻印と考えられるものには「左寺」・「東寺」銘がある。「左寺」銘のものは、平瓦凹部狭端部ほぼ中央に施すもの(383)と丸瓦凹面に施すもの(384)があり、いずれも陰刻である。「東寺」銘には丸瓦の凸面に陰刻するもの(385)と、平瓦の凸面に陽刻するもの(407)がある。平瓦の凸面に陽刻するものには印の文字が裏文字となっているものがある。これらのほかに平瓦の凸形成形台に文字が刻まれていて、それが整形時に平瓦凹面に陽刻されるものがある。文字種としては「工」(403・404)・「𠄎」(406)・「中」(405)があり、「工」が最も多い。また、丸瓦凸面に和歌を線刻したものも出土している(417)。和歌は文字と焼成時に生じたひび割れが

重なって判読し難いが、4行が記されており、次のように読める。

「何事も華とちり行
世の中に
我よ人よとゆふぞ
は^[かなき]」

(3) 金属製品

金属製品には金製品・銅製品・鉄製品があり、多くは江戸時代あるいはそれ以降の時代の遺構・整地層などから出土している。

金製品(図版43) 409は、径2.6cm、厚さ0.7cmの丸餅状の塊をほぼ半分に切断したものである。重さは15.1g(比重16.7)。溝126から出土した。

銅製品(図版43) 銭貨が最も多く、ほかにキセル(雁首・吸口)、火箸、鋏など様々な種類が出土したが、ほとんどが用途不明である。銭貨は遺構や遺物包含層から71枚出土しており、銭種の明らかなものは表4に示した通りである。銭種の不明なものは21枚あって、そのうちには7枚が重なって固着したものが2個体あり、いずれも江戸時代の井戸から出土している。水滴(410)

表4 出土銭貨一覧表

名称	点数	初鑄年代
祥符元寶	3	祥符元年(1008年) [北宋]
祥符通寶	1	祥符元年(1008年) [北宋]
皇宋通寶	1	寶元元年(1037年) [北宋]
治平元寶	1	治平元年(1064年) [北宋]
嘉祐通寶	2	嘉祐元年(1056年) [北宋]
元豐通寶	2	元豐元年(1078年) [北宋]
嘉泰通寶	1	嘉泰元年(1201年) [南宋]
寛永通寶	39	寛永十三年(1636年)

は最大径4.0cm、高さ2.3cmの扁平なもので、江戸時代の土壌から出土した。飾金具(413)は幅1.8cm、長さ7.1cm、厚さ0.1cmの薄い板状で表面には唐草紋を施す。飾金具(412)は最大幅1.5cm、長さ5.8cmの立体的なもので、旗が靡くような表現とみられる。用途は不明で、部分的に金色を呈するので元は金メッキが施されていたと考えられる。飾

金具は2点共に、江戸時代の遺物包含層から出土した。皿(414)は残存状況が良くないが、直径7.9cm、深さ1.0cmで、一方に短い突出が残存しており、ここに木製の把手が付けば杓子とも考えられる。分銅(411)は最大径1.8cm、高さ5.4cmの円錐形の先端に0.4cmの穴の穿いた吊手が付く。天秤の重りと考えられる。重さ52.8g。皿および分銅は池2001より出土した。銅製函(408)は一辺が3.8~4.0cmのほぼ正立方体の函である。体部は幅3.6cm、長さ14.8cm、厚さ0.1cmの側板を正方形に折り曲げ、0.05cmの薄い底板をおよそ0.4cm底上げするような形で接合する。蓋は底板と同じ厚さの同板四辺を0.3cm折り曲げて被せる。底板と蓋は中央と八方に内側から細かい打ち出しが施されている。これを銅製針金で括って密封するような形で江戸時代の溝から出土した。函の内部には粗い白砂に細かい金・銀箔の混じったものが充満していた¹¹⁾。

鉄製品 大半が鉄釘で、ほかは残存状況が悪く、原形のわかるものはない。

(4) その他の遺物

その他の遺物には、古墳時代の遺物や木製品・石製品・土製品などがあり、出土量が少ないので一括して扱う。なお、ガラス小玉・白玉・打製石鏃も出土している。

その他の土器類(図版44) 古墳時代の土器類は、古式土師器・須恵器などがある。古式土師器は布留式併行期のもので、平安時代以前の流路堆積層から部分的にまとまって出土した。いずれも小片であるが、摩滅は少ない。須恵器には杯身・杯蓋があり、主に後世の遺構や整地層から出土している。

墨書土器(418)は、土師器皿の底面内外面に墨書されている。江戸時代の土壌から出土した。

(内面) 灸

(外面)

火消壺(420)は、地鎮土壌71から出土したもので土師質の壺と蓋からなる。壺は底部が大きく平らで、低い体部と広口の口縁部を持つ。器高7.7cm、口径10.8cm、最大腹径14.4cm。同様のものが複数の地鎮土壌から8個体程度出土しており、地鎮具を埋納するために用いられたものと考えられる。

木製品(図版43) あまり残存状況が悪くなく、木球や木簡などが江戸時代の井戸や池から出土している。

木簡(415)は、正目の板材を用いたもので下端の一部を欠損する。上部の幅1.9cm、下部1.5cm(復元)、長さ6.5cm、厚さ0.2~0.3cm、表面に下記の墨書が認められる。江戸時代の池2001から出土した。

善□□^[兵衛]

石製品(図版43) 砥石や石鍋、石臼、硯、碁石、滑石製板状製品や凝灰岩片などが出土した。砥石は江戸時代の各遺構から比較的多く出土している。凝灰岩片も各遺構に混入して比較的多く出土しており、ほとんどのものが加工痕があって明らかに基壇の延石であろうというものもある。それらの多くのものが火を受けていることから、それらが使われていた建物が火災を受けた後に

廃棄されたものであろう。

滑石製板状製品(416)は、滑石製石鍋の口縁部分を切断して加工したもので、内面は平坦に削って紋様を彫刻する。その題材は不明であるが、草花類であろうか。外面は石鍋の凸帯部分を残して縦方向に2箇所穿孔している。紐を通して提げることができ、護符のような用途、あるいは彫刻部分を印として用いたのではないかと想像される。第2面の遺構検出中に出土している。

土製品(図版44) 泥面子や人形、埴、埴塼、用途不明の瓦質土製品などがある。

瓦質土製品(419) 底部は平坦で径約18.5cmのほぼ円形、体部には拳大より小さな半球形の受け皿を多数不規則に付け、不定形な造形を呈する。一方はそれら受け皿状のもの間を縫うように頂部から細い溝が作られ、体部裾の扁平な受け皿に続く。その反対側は柱状のものが垂直に立てられ、その上端にも小さな受け皿があり、最頂部となっている。高さは18.5cmで、内部は中実である。室町時代の土壌から出土した。

5.まとめ

今回の調査について時期ごとにその成果をまとめる。

古墳時代 古墳時代については流路を検出したのみで明確な遺構を確認してはいない。そのため堆積層の状態を観察する一部の調査にとどめた。にもかかわらず、ここからは古式土師器(布留式土器)がかなり多く出土している。いずれも小片であるが摩滅は比較的少ない。こうした遺物の出土状況は近隣にこの時期の遺跡が存在する可能性を示すものと考えられる。これまで当地周辺で古墳時代の遺構が確認された例はなく、今後の調査に注意を促すものである。

平安時代 上述の流路は古墳時代には埋没したものの、その跡は平安時代後期頃まで低湿地状を呈していたものと思われる。このため遺構が存在する場所は微高地を呈する調査区の南東部に限定されている。しかも、数が少なく墓と考えられる遺構も存在する。こうした状況から、今回の調査区内には平安時代を通じて主要な施設は造営されなかったものと考えられる。ただ、注意を要するのは平安時代末期から鎌倉時代の整地に伴って投棄された大量の瓦である。大半が平安時代中期のもので、焼け歪んだり火膨れたもの、スサ入り粘土が付着して明らかに窯体の一部として利用されたものなどが多く含まれている。調査区のすぐ東側で1984年に実施された洛南高等学校新築体育館用地の調査¹²⁾でも同様の状況が報告されており、近隣に瓦窯が存在していたことはほぼ確実である。おそらく、流路左岸の微高地に河岸からの斜面を利用して瓦窯が営まれていたものであろう。平安時代後期から鎌倉時代に行われた整地が、この微高地を削って流路跡を埋め戻すものだったために瓦窯が破壊され、窯体や灰原の瓦が縁辺部に投棄されることになったと推測できる。当十町は倉垣院と共に修理所が比定されているから、瓦窯はそれに伴う施設であったと考えられよう。

鎌倉時代 今回の調査では鎌倉時代の遺構はほとんど検出できなかった。空白の時期といえる。東寺の子院の成立は鎌倉時代にさかのぼるとされているが、当地は低湿地だったためにその利用

が遅れたのであろうか。ただ、この時期の遺物は多数出土している。その大部分が瓦類で、特に文覚上人が東寺再建に用いたとされる瓦が最も多い。これらの瓦は大型で硬質に焼き締まっており、瓦本来の用途ばかりでなく建築資材として室町時代以降の建築物に再利用されたため出土数が多いものと考えられる。

室町時代 これまでと様相が一変し、多数の遺構を確認している。この時期、調査区一帯には東西、南北方向の溝が巡り、これらによって方形の区画がなされている。各区画内には建物、倉庫や室、井戸、土塀などが配置され、周辺には柵列もあり、それぞれが独立した空間を形成している。この内、調査区の北西部で検出した建物2197は内部の構成から、仏間を備えた客殿風の建物であると推定できる。文献によれば東寺の寺域北側に鎌倉時代から子院が形成され始めたことが窺え、この建物はそうした子院に建てられた客殿に相当するものであると考えられよう。ただ、そのほかに検出した建物はいずれも規模が小さく、敷地の範囲も狭い。これらがそれぞれ個別の子院を構成しているか否かは今後の研究課題である。なお、この時期の遺物には、仏具と思われる土器、置物風の瓦質土製品や紋様の施された石製品など、豊かな精神生活を示すものが多く出土しており、この地区の性格を物語っている。

また、検出した溝の中には溝2400や溝2159のように幅が広く、底部に凸凹があるものが存在する。明らかに排水よりも水を湛える堀の機能を重視したものである。室町時代には文明の土一揆などたびたび東寺が戦場になる場面があり、これらの溝が防御施設としての機能を付加されてい

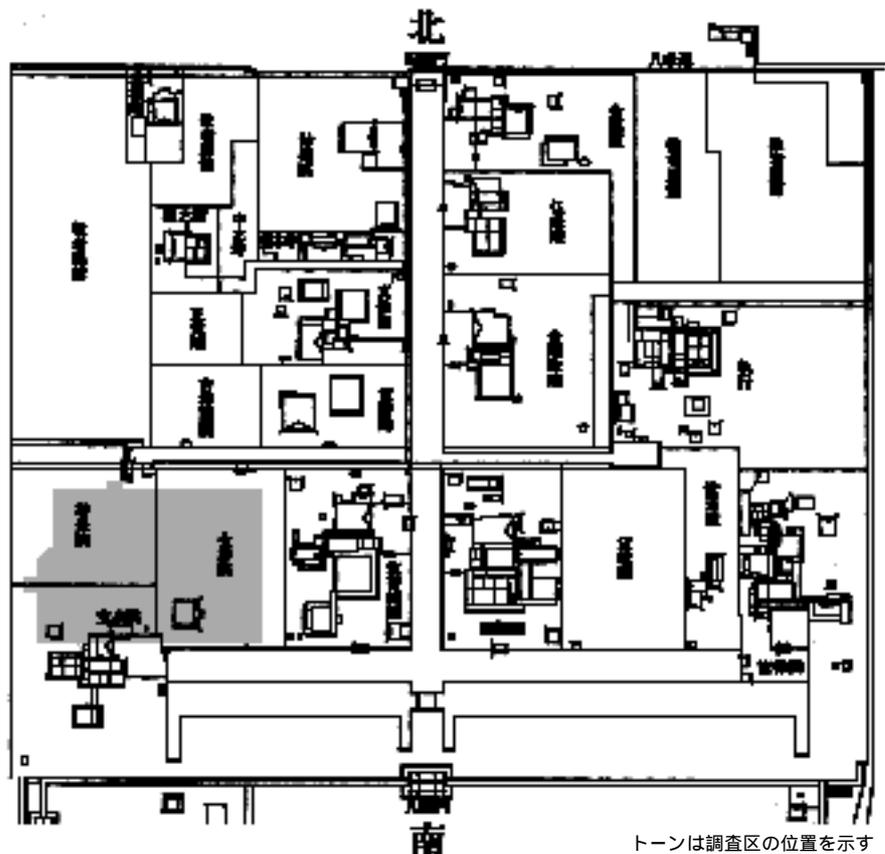


図9 江戸時代の伽藍および子院古図（トレース図）

たことは疑う余地がない。

江戸時代 江戸時代中期以降は調査区内が3つの区画によって構成されていることが明らかになった。一方、東寺には江戸時代中期に記された絵図面「江戸時代の伽藍および子院古図」が残されており、そこには東寺の北側に成立した子院の位置やその名称が詳細に記述されている(図9)。調査成果をこの絵図面と比較すると土地区画の状況が非常によく一致していることがわかる。これに従えば、調査区の東半が金勝院、北西が増長院、南西が宝泉院に相当すると考えられる。さらに絵図面には主な建物の配置や内部構造が記されているが、調査区の南西部で検出した建物(建物2024・2112)が宝泉院の建物の記述とよく似ている。同様の状況は洛南高等学校新築体育館用地の調査でも報告されており、これらは発掘調査成果と文献資料が一致した例として注目できる。ただ、記述と一致しない遺構も多く、今後遺構の時期や絵図面の成立時期を詳細に検討し、さらに研究する必要がある。

以上、簡単に今回の調査成果をまとめたが、調査目的の一つであった東寺創建当初の施設の解明については十分にその成果を果たせなかった。今後周辺での調査に期待したい。

註

- 1) 長谷川行孝・杉山信三「東寺寺地 - とくに北部の問題」『(財)真言宗京都学園 洛南高等学校新築体育館用地埋蔵文化財調査報告』 東寺境内発掘調査団 洛南高校班 1981年
- 2) 川上貢「東寺宝泉院の客殿」『日本中世住宅の研究』 中央公論美術出版 1958年
- 3) 『東寺院家図』 東寺蔵
- 4) 杉山信三ほか『教王護国寺防災施設工事・発掘調査報告書』 1981年
- 5) 京都府教育庁文化財保護課『重要文化財教王護国寺灌頂院東門北門修理工事報告』 1959年ほか
- 6) 上村和直「平安京左京九条一坊・東寺旧境内1」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- 7) 鈴木久男「東寺講堂須弥壇」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2000年
- 8) 註1に同じ
- 9) 上村和直「平安京左京九条一坊・東寺旧境内2」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- 10) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 11) 内容物の分析は、株式会社 堀場製作所分析センターのX線分析顕微鏡測定による。
- 12) 註1に同じ

参考文献

- 『古建築からのメッセージ 東寺の建造物』 東寺(教王護国寺)宝物館 1995年